

## 本年の白鳥白書

荒尾稔

114-0015 東京都北区中里1-20-8

### 渡来状況

2000-2001年は、記録的な降雪と寒波の到来によって、日本への白鳥渡来地でいくつもの記録が出来ました。

1. 福島、茨城、千葉県下では、渡来数が軒並み50%～2倍に増加 千葉県本埜村では、昨年は最大147羽が、本年は273羽（オオハクチョウ7羽を含む）。茨城県菅生沼では、昨年240羽が416羽でした。

福島県いわき市夏井川では、例年最高で700程度が、950羽を越してしまった。また、死亡数も福島県浜通りの檜葉で10羽、中通りの郡山でも10羽以上で、夏井川でも死亡2羽、骨折1羽でした。

死亡原因の殆どが、俗に言う栄養失調による衰弱死と言う状態で、ここ10年来殆ど聞いたこともない原因です。

これは、北海道や青森、宮城、秋田、山形などで越冬していた個体が正月明けの急な寒波到来で湖面が凍結し、田圃も雪をかぶって採餌できずに急遽南下したためでしょう。福島県下など慣れない場所で餌が確保できない個体が衰弱した模様です。昭和34～35年度では、この状態で多数死亡しました。今回は、多くの場所で給餌されており、そこまで悪化しなかった模様です。

2. 渡去も例年よりも、1週間以上遅れています。本埜村では例年3月4日頃に最後の群が渡去するのですが、この冬は3月17日までおり、白井市の溜池にはオオハクチョウが3月26日まで滞在しました。

夏井川では、現在も6羽が滞在しており、そのうち5羽が幼鳥で、とくに栄養状態の悪いままので散見され、それに引きずれる形で複数羽が残留しています。本年度は異常なほど幼鳥の比率が高いとの報告が相次いでいました。これも衰弱死亡に関連していると考えられます。

3. 参考までに言いますと、昭和34～35年度では、青森県だけで90羽が死亡し(県林務課調査)、その原因の多くは衰弱死でした。北海道尾岱沼では、毎年600羽程度の死亡を出していたとの報告もあります。

本年は、上記北日本での白鳥類の死亡数の調査も改めて必要かとも思います。